

「偶像にささげた肉について」 2026.08.16 中村寿夫
コリント人へ手紙第一 8章1節～13節

はじめに

今年は、新約聖書「コリント人への手紙第一」から、みことばを学んでいます。

今朝は、8章1節から13節です。使徒パウロは、コリント教会からの手紙にあった「偶像にささげた肉について」の質問に答えます。

1 知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を高めます（1-3）。

「偶像にささげた肉について」答える前に、使徒はキリスト者の行動の原点というべきものについて語ります。それは、「愛」に生きるということです。

「私たちはみな知識を持っているということなら、わかっています」。使徒は、なぜこのようなことを言ったのでしょうか。

その知識というのは、4節～6節に言っていることです。つまり、「偶像の神は実際には存在せず、唯一の神と唯一の主イエス・キリストだけが存在する」のだから、偶像にささげた肉を食べても何ら差し支えない。コリント教会の一部の人たちは、この知識で行動していたのです。

しかし、パウロは、「ちょっと待ちなさい」と言います。それで、躓いている人がいるではないか。それは、愛に生きることではないと言うのです。「知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を高めます」とは、そういうことです。「人がもし、何かを知っていると思ったら、その人はまだ知らなければならないほどのことをも知っていないのです」と警告し、「人が神を愛するなら、その人は神に知られているのです」と、神を愛することと、神に知られることの大切さを教えています。

例話：現在は情報があふれ、テレビのクイズ番組では知識を競いあっています。ただ、昔は、情報も少なかったので、たいていの人たいていの事を知っていました。例えば、歌にしても、だれもが知っていました。が、今は、私たちの知っている歌は、ほんの少しです。ですから、謙遜になるはずですが、今でも「知識は人を高ぶらせ」ることに、注意する必要があるでしょう。

2 世の偶像の神は実際にはなく、唯一の神と唯一の主イエス・キリストがあるのみ（4-6）。

「偶像の神は実際にはないものである」。確かに、神々と呼ばれるものはたくさんありますが、それらは、人間が作ったものであり、多くは偶像です。芸術品として価値のあるものはあるでしょうが、実際には、木、石、金、銀、銅で出来た人形に過ぎません。

本当に存在するのは、天地万物をお造りになった唯一の神と、主イエス・キリストです。

ですから、コリントの一部の人たちが言っているように、「偶像にささげた肉を食べても、何ら差し支えないのです。偶像の神は、存在しないのですから。

適用：私の子どもの頃、家には神棚、仏壇がありました。そこに普段からお供えをしていましたし、人様から頂き物をすると、先ず仏壇に供えました。

キリスト者となってから、仏壇に供えたものを食べていいのか、と考えるようになりました。偶像に供えたのだから、食べたら偶像礼拝になるのではないか。

でも、「偶像の神はないのだ」と分かると安心して食べるようになりました。

3 すべての人にこの知識があるのではない（7-13）。

「私たちが神に近づけるのは食物ではありません。食べなくても損にはならないし、食べても益になりません」とパウロの言う通りです。

しかし、ここに問題があります。それは「すべての人にこの知識があるのではありません」という事実です。「ある人たちは、今まで偶像になじんで来たため偶像にささげた肉として食べ、それで彼らのそのように弱い良心が汚れるのです」ということが起こります。

知識のある人は、偶像の宮で食事をする。しかし、知識のない人は、偶像の宮で食事をしているその人を見て、偶像礼拝をしてもよいのだと誤解してしまう。

そうすると、その人に罪を犯させるようになる。

使徒パウロは、それはいけないということです。「あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまずきとなら

ないように、気をつけなさい」と勧めるのです。

そして、パウロみずから、「もし食物が私の兄弟をつまずかせるなら、私は今後いっさい肉を食べません」と言います。

自分の権利や自由を制限する。これが使徒が説いた「愛に生きる」ということです。

強制ではなく、自分から、自分の権利を制限して、人をつまずかせないように生きることを、ここから学びましょう。

教会には、まだ十分に聖書の知識のない人、信仰の弱い人がいます。その人たちは、何かと人や教会に躓きやすいのです。

聖書をよく知っている人や、信仰の強い人は、そのような人を見て「めんどくさい」「もっと強くなれ」と思います。躓きの石があったら、「躓く前に飛び越えればいい」と考えます。しかし、飛び越えられない人もいるのです。

使徒パウロは、「躓かせないために、肉を食べない」と言って、自分を制限して、その弱い人を助けようと思いました。

私たちも、このような初代教会の指導者を見習いたいものです。

結論

「すべてのことが私には許されたことです。しかし、すべてが益になるわけではありません」（6:12）。

キリスト者は、主から自由を与えられています。しかし、自由よりも、権利よりも、もっと大切なものがあります。それは「愛」です。「愛に生きる」者になりましょう。

聖書が私たちに求めているのは、

- 1 神様がおられて、求める者には必ず応えてくださると信じること。
- 2 自分が神様に罪を犯していることを認めること。
- 3 イエス様が私たちの罪の身代わりとなって十字架にかかり死んでくださったこと、そして復活して、生きた救い主として私を迎えてくださることを信じること。

4 イエス様を信じるだけで、自分の罪が赦され、神様の子どもとして受け入れられることを信じることを。

招きのことば

イエス様は、あなたの罪を赦すために、十字架におかかりになりました。あなたの罪を赦し、あなたが天国に行けるようになってほしいのです。

「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」

「見よ。わたしは戸のそとにたって叩く。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする」

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」

祈り

父なる神様。あなたの御子イエス・キリストを感謝します。私はあなたに罪を犯して来ました。地獄に投げ込まれても当然な人間です。

しかし、イエス様は、私の罪のために十字架にかかり、私のために死んでくださいました。

あなたは、私のすべての罪を赦してくださると言われました。感謝します。

私は、いま、イエス・キリストを私の救い主、私の神として信じ、受け入れます。

あなたは、私をあなたの子として受け入れてくださり、私を新しく生まれさせてくださることを感謝します。

今日からあなたに従っていきます。どうぞ、弱い私を導いてください。

イエス・キリストの御名によってお祈りします。
アーメン。